



大阪の 社会福祉

2022年6月

805



社会福祉法 大阪市社会福祉協議会

<https://www.osaka-sishakyo.jp>



▲令和3年4月に行われた青空カフェの様子

平野区

コロナ禍だからひらめいた！
青空カフェは、
みんなの笑顔カフェ

「青空カフェを開きたい」
1年前にそう思っていたのは、
喜連北社会福祉協議会会長の
植西正子さん。コロナ禍になる
まで、「ふれあい喫茶」や「ふ
れあい食事サービス（会食）」な
どを精力的に開催し、多くの参
加者とふれあってきました。

しかし、新型コロナウイルス
感染症のまん延により、それら
の活動はすべて休止せざるを得
ない状況になりました。

「ふれあいの場として使って
いる喜連北地域集会所（喜連北
老人憩の家）」には、隣に喜連北

傘をさしながら、
楽しくおしゃべり

昨年4月下旬に開催した1
回目は大反響。続けて5月にも
2回目の青空カフェを開催しま
したが、残念ながら雨に。「そ
れでも皆さん来てくれて、傘を
さしながらコーヒーを飲み、会
話を楽しんでおられました。そ
んな光景は初めて見ました。そ
れだけ出かけられずに我慢され
ていたんだな、もっと早く開け
ばよかったなと反省しまし
た」。秋には3回目も計画して
いましたが、まん延防止等重点
措置などの発令もあり、心なら
ずも断念。ようやく今年5月、

HB

近所の中学校の用務
員さんが、学校から
少し離れた通学路の
ごみを拾っていた。火ばさみ
でつまんだごみをビニール袋
に入れていく▼数年前、校内
禁煙が言われたところ、生
徒の来ない裏門の外で煙草を
吸っていた先生がいた学校
が、なんだかわかり出してい
るように思う▼それを示して
いるのは、毎朝校門に立つ先
生の姿勢だ。「今日も一日頑
張ろう」と生徒を笑顔で迎え
るのではなく、みんな腕を組
み、どう見ても服装や髪型を
チェックしているように見え
ていた▼ところが最近では、
通学路のごみを拾う先生や、
校門でなく、交差点で生徒の
安全を守りながら、地域の人
と挨拶を交わす先生もいる。
校門に立つ先生たちの顔も、
最近では笑顔になっている▼

先生が変われば生徒が変わ
る。校内にごみを捨てないで
というポスターを壁に掲げた
り、一緒に地域のごみ拾いを
しませんかと呼びかけたり。
きれいな印刷ではない手作りの
ポスターが輝く▼地域と学
校が近くなるように、生徒た
ちが努力をしている。学校が
変われば地域も変わる。福祉
教育というのはこういうこと
を言うのだろうか。それを先導
した用務員さんがいた。（石）



コロナ禍だからひらめいた！青空カフェは、みんなの笑顔カフェ

13日に3回目を開くことになりました。

ところが当日はまたしても

雨。2回目のように公園での実施も検討しましたが、感染者数も減少傾向で、3回目のワクワクン接種を済ませた人も多いことから、集会所内でテーブル数を減らし、感染対策をしっかりとって開催することにしました。

10時のオープン前には待ちきれない地域の皆さんがぞくぞくと訪れ、オープンと同時にあっという間に満席になりました。注文をとる人、コーヒーを運ぶ人などスタッフは大忙しでしたが、その顔は皆笑顔にあふれていました。



誰もが気軽に
来られる
雰囲気づくり

「ここに来れば誰かに会える、という思いがあるので皆さん心待ちにされていたと思います。私たちも元気な顔を見ると安心できるし、元気をもらえます」と喜連北連合町会女性部長の山本裕子さん。女性部としてこうした活動に参加するまで、

地域の人たちと町内で会っても挨拶することは少なかったそうですが、「ここで活動するようになり、自分から声をかける勇氣をもらえた」と話す山本女性部長。

喫茶に初めて来た人や一人で来た人にも楽しんでもらえるよう、スタッフが積極的に声をかけるのはもちろん、常連の参加者が気軽に話しかけてくれることもしばしばだそう。誰もがフランクで温かい雰囲気づくりをしています。



もっと多くの人に
この場所を
知ってほしい

およそ3年続いているコロナ禍は、ようやく感染者数も減少傾向で緩やかながら元の日常を

取り戻しつつあります。喜連北地域では、すでに百歳体操やストレッチ体操が再開して

いて、定例のふれあい喫茶や食事サービスも今後、再開していく予定です。

「コロナの感染状況を見ながら、秋にまた青空カフェを開催したい。他にも世代間交流

につながる地域オリエンテーションもできないかと計画中です」と意欲的な植西会長。喜連北地域内を歩いて回り、地域の知らないところを再発見してもらおうというもの。高齢者が自宅から出る機会をつくることと、集会所や喜連北第一公園に来てもらうことで、ふれあい喫茶や集会所でのさまざまな活動を知ってもらいたいというのも、ねらいです。



新たな取り組みや
課題にチャレンジ

そんなひらめき上手の会長と一緒に地域の声や困りごとを拾い、解決への取組みを進めている



▲感染防止対策を徹底し、屋内でカフェを開催。補助金で屋外用に購入した机もお披露目

るのが、区社協・第2層生活支援コーディネーター※（ささえ愛支援員）の矢野晴枝さん。

「喜連北地域は、上に高速道路が通る大きな道路があります。喫茶などに参加するためには、この道路を横断しなければならぬ地域もあり、高齢者にとっては大きな負担です。そこで、地域のスーパーとの連携や、ICTを使った交流なども

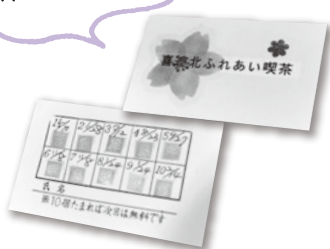
検討しています」

感染防止対策はもちろん、参加者が安心、安全に参加できる工夫やアイデアは必要不可欠です。コロナ禍で立ち止まってしまった時間だからこそ見えた、新たな取り組みや課題にチャレンジして、たくさんの方のふれあいがまた日常に戻ることを期待しています。



▲植西会長を囲むボランティアの皆さん（左から4番目：山本女性部長）

参加のスタンプを
貯めると
1回無料などの工夫も



個人の変化を地域の気づきに

気軽に参加して、気長に続ける住民

参加型の体力測定「桃谷ヘルスチェック」

おためし開催を
ふまえて
バージョンアップ

後、希望者は結果や問診票などをもとに訪問看護師や理学療法士から「健康相談」を受けられます。

中央区桃谷地域では、自身の健康に目を向け、日ごろから健康づくりを意識するきっかけになればと、5月24日に桃谷会館で「桃谷ヘルスチェック」を開催しました。桃谷連合自治会主催で、中央区訪問看護事業者連絡会や理学療法士などの協力も得ながら、住民と専門職がタッグを組み実施したものです。

会館には8種のブースが設けられ、順番にそれらを回っていきます。「身長や骨密度」「体力測定」「フレイルチェック※」の測定をするのは、事前にレクチャーを受けた桃谷地域の住民です。測定終了

自治会会長の原田壽幸さん。おためし開催後に出た反省や改善点をふまえてバージョンアップした第1回目は、専門職の人数を増やしたことで、健康相談の内容がより充実し、おためし開催の時は参加者だった住民が今回は測定者となり協力者が広がっています。

1回目の開催に先だって、昨年2月におためし開催をしました。「協力者を募るためにもひとまずやってみよう、と実施しましたが、それぞれのブースでかかる時間も分ならず、すぐに会館が満員状態になりました。今回はあらかじめ受付の時間帯を6つに区切ったほか、ブースの配置も考えたことで、おだやかなペースで健康相談を受けてもらえた」と話すのは、同連合

第一の目的は、
会館へ来てもらうこと

「単に健康診断をするだけなら、かかりつけ医で相談すれば済むことです。しかし、地域でヘルスチェックをする第一の目的は、地域の人の

測定結果をもとに理学療法士や訪問看護師に相談



▲測定結果をもとに理学療法士や訪問看護師に相談



▲フレイルチェックブース・イレブンチェックのようす



▲桃谷地域の人が説明や測定をおこないます

的は、地域の人の会館まで足を運んでもらうこと。家から一歩外へ出るだけで季節を感じ、気分転換でき、健康にもつながる。コロナ禍で外出自粛が身についてしまった高齢者が、出かけるきっかけに

2階
⑦訪問看護師
保健師
健康相談ブース

⑧アンケート
記入場所

入口

健康体操情報

フレイルチェック
ブース
④片足立ちテスト

フレイルチェックブース
③歩行テスト

フレイル
チェックブース
②指輪っかテスト
イレブン
チェック

①ヘルスチェックブース

⑤理学療法士
相談ブース

⑥地域活動
紹介ブース

なれば。そして『また行きたい』と思ってもらえるよう、工夫しながら今後も継続して、3か月ごとに年4回開催していきたい」と原田会長。

ご近所さんのちょっとした変化に気づいて、皆で情報共有し、声をかけたり、見守ったりできればいいと思います」

ヘルスチェックで測定した記録を記入したシートは参加者が持ち帰るだけでなく、地域でも保管しています。年4回のデータを蓄積すれば、自分の体の変化を1年分ふりかえることができる。健康づくりのためにも少し運動しよう、地域活動に参加してみようと考え始めるきっかけにもつながります。また、地域の人が測定される側や、測定する側にもなることで継続しやすいと考えています。

おしゃべりしながら
新たな気づきを発見

今後の抱負として区社協・第1層生活支援コーディネーターの御木真理さんは、「今日は、専門職として訪問看護師と保健福祉センターの保健師、理学療法士が参加し、健康相談に乗ってもらいました。今後は医師や歯科医師、薬剤師などにも順に協力してもらい、いろいろな相談をする機会になればと考えています。住民と多彩な専門職とが協働で実施するヘルスチェックを他の地域にも広めていきたいです」と語りました。

「最近物忘れが気になって…と話すご近所さんも来られています。自分たちでは分からないことも、理学療法士の先生や保健師さんが同じ会場で相談にのってくれるので、安心感があります。

社協で働く私の仕事



社会福祉協議会（略称…社協）は、社会福祉法に基づき、「地域福祉の推進」を目的として、さまざまな事業を展開しています。例えば、地域での福祉

活動の立上げや継続の支援、ボランティアの育成、関係団体のネットワークづくりといった「地域支援」や、生活にお困りの方や高齢者への相談支援と

いった一人ひとりの暮らしを支える「個別支援」を進めています。



▲大阪市立社会福祉センターで開かれた法人就職説明会のようす

そんな社協の仕事について身近に感じていただくきっかけとなるよう、月号では入職2年目の栗川朋佳さんと5年目の泉颯斗さんに、社協を志したきっかけや担当している仕事、そこに込める思いをインタビュー形式でお届けします。

※本記事は、4月26日に開催した市社協法人就職説明会の内容をもとに編集しています。

―社協職員を志したきっかけは？―
人と関わることが好きで、同じ目標に向かってたくさんの人と一緒に何かをやり遂げられる仕事につきたいと考えていました。資格取得のための実習で社協に行ったこともあり、制度の狭間の問題に対応できる社協をめざすことにしました。

―担当している仕事内容は？―
主にボランティア担当をしています。各区社協にあるボランティア・市民活動センターでは、ボランティアをしたい人とボランティアに来てほしい人をつなぐ役割があります。活動のサポートだけでなく、地域住民の居場所づくりや、新たな活動者の発掘、センターの周知という意味合いを込めて「講座」を開催します。令和3年度は、コロナ禍でボランティアさんの活動先が少なく、活動者のモチベーションを維持する難しさを感じながらも、「今だからこそ何ができるか」をボランティアさんと一緒に考えた一年でした。

他にも、体験や座学を通して福祉について知るきっかけづくりの場となるよう、福祉教育をおこなっています。福祉教育のプログラムとしては当事者による講話や車いすなどの疑似体験、ボッチャなどの障がい者スポーツ体験などがあります。実施した際に「障がいのある人は大変」「自

入職
2年目

くりかわ ともか

栗川 朋佳さん

令和3年4月入職

西成区社会福祉協議会 地域支援担当



▲特別養護老人ホームでおこなわれている園芸ボランティア

分には関係のない話」などネガティブな印象、無関心で終わらないように、誰もが暮らしやすいまちづくりのために、どのような言葉で伝えればいいのかを考えながら取り組んでいます。準備を進めるなかで、自分自身も福祉に対する学びが深まってきたと感じています。

―社協職員としての仕事のやりがい？―
1年目は住民やボランティアの方に名前を覚えてもらうことを目標にしていたので、お会いした時は必ず声をかけること、しっかりと自分の名前を伝えることを心がけました。その結果、関係がつくれただけでなく、「成長したね」などと声をかけてもらえることも増えて嬉しかったです。

―今後、取り組みたいと考えていることは？―
コロナの影響で、区ボランティア・市民活動センターの登録ボランティアが活動できる機会が



▲中学校で福祉教育をしている栗川さん

減っているという状況がまだ続いていて、電話でしか話したことがない方もいます。なので、個人やグループでどのような活動をされているのか、どのような想いでされているのかを知り、関係を築いていきたいです。また、ボランティア交流会など、他の活動者がどのように活動しているのか知り、自身の活動のヒントになる情報交換ができるような機会をつくることができればと考えています。

2年目も住民や活動者の方々と大いにし、皆さんの想いをカタチにできる関わり方をしたいと思っています。

学生さんの頃、福祉の道に進みたいと強く考えていたわけではなかったのですが、福祉について学ぶうちに、地域の方と働しながら地域の居場所づくりをしたり、地域福祉を推進していく仕事がしたいと考えて志しました。

―担当してきた仕事内容は？―

入職時に担当していた地域包括支援センターは、高齢者の相談を受ける役割があります。相談に来られた方の話を聞き、どのように解決していくかを相談者と一緒に考えながら、必要に応じて関係機関や制度につなぎます。

高齢者の困りごとといっても、介護保険に関するだけでなく、介護予防や認知症に関することなどさまざまです。区社協内の他部署や関係機関と連携しながら、相談者が安心して暮らし続けることができるように、サポートします。相談が来ることを待っているだけではなく、実際に出かけ、気になるご近所さんのことを住民から相談してもらえるような関係づくりや周知にも取り組んでいます。

―今後の展望については？―

社協職員として5年目を迎え現在では、いわゆる「中堅職員」と呼ばれるようになりました。入職当時を振り返ると、目の前の業務をこなすことに精いっぱい、職場や職員など、周りを見る余裕がなかったように思います。また、そのようなことで、地域の方々と関わる際にどうしても「自分に余裕がない」状態になってしまい、自分本位の姿勢での関わりになってしまっていました。

しかし、中堅職員となった今、より一層の周囲（地域・関係機関・職員）と協働していく力が必要だと感じています。そのためにも、さまざまな方面へのアン



入職
5年目

いずみ はやと
泉 颯斗さん

平成30年4月入職 西成区社会福祉協議会 地域包括支援センター
配属
令和4年4月 大阪市ボランティア・市民活動センター配属

きました。

―社協職員としての仕事のやりがいとは？―

近隣住民から相談のあった高齢男性を支援したときの話です。お会いした当初は、足腰はふらふらで買い物すらままならない状態でした。一緒に困りごとを解決したいと伝えても、「病院には行きたくない。介護もいらん。家にも



▲ケアマネジャーと一緒に訪問し相談者と面談

テナを張り巡らせることで経験を積み、見識を広げ、地域の方々と関わる際の自身の引き出しをより多く準備し、「泉」の良さを最大限に活かして、地域をはじめ、関係機関や職員へのはたらきかけを強めていけたらと考えています。



▲介護保険や認知症について出前講座

Zoomで集えるシニアの居場所づくりをサポート



▲コロナ禍の安全対策もしっかりとって開催

天王寺区社協では、令和3年9月と令和4年1月の2回、「60代から始める! Zoom講習会」を開催しました。講習会はそれぞれ4回シリーズで、Zoomの使い方について学びました。新型コロナウイルス感染症拡大で、人と直接会えない日々が続くなか、テレビなどで盛んにZoomが話題にされていたこともあって、講習会は2回とも定員の倍の応募がありました。参加したきっかけとして、「Zoomに興味があった

から」「新しいことに挑戦するため」をあげた人が多くみられました。

講習は、「スマホの学校リーガルサローラ」の協力のもと、「Zoomとは何か」「どんなことができるのか」といった初歩的なところから、設定方法や使い方など、高齢者でも分かりやすくを念頭に開催されました。しかし、「ダウンロードって?」「アカウントって?」といった人も多く、パスワード設定やZoomのホスト(主催者)のなり方を理解してもらうのに、四苦八苦した場面もありました。そこで2回目の講習会では、1回目に参加したメンバーに協力を求め、サポートする側で参加してもらったり、アンケートで出た改善点を反映するなどバージョンアップさせていきました。



「講習会をして終わりではなく、Zoomを使った地域ボランティアの育成が視野にありました」と話すのは、会の運営や進行役も務めてきた、区社協・

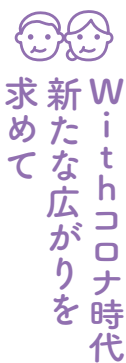


▲Zoomで会話をしているプロジェクトチーム会議の様子

第2層生活支援コーディネーターの市林麻依さん。講習会終了後にアンケートを実施し、引き続きZoomを活用しての取り組みや企画するメンバーを募集しました。2回目の講習会後も同様に募集し、現在も「Zoomの集い」や「プロジェクトチーム会議」として約10人が交流を続けています。

「まず、プロジェクトチームメンバーが集まって次の『Zoomの集い』を開催する日時と、どんなことをするか話し合います。その後、集いメンバーに連絡して月に1回程度、集

まっています」。講習会のはできたと思っけていても、いざ一人でやってみると意外とできなかったり、忘れてしまったり。習ったことを実践してみることが理解をより深めることができるため、メンバーがZoomで集まれる機会を自分たちでつくり、活用していつてもらうのがねらいです。



今後、引き続き講習会の開催も検討していますが、コロナ禍の生活スタイルも少しずつ以前のように戻りつつあり、対面で人と会える機会も増えてきています。Zoomを使う機会が減ることも想定されるため、今後の集いの進め方についても検討中です。「プロジェクトチームのメンバーを中心に、受けていた側から支える側に転換できるよう、うまくはたらきかけていけたらと思っています」と区社協・第1層生活支援コーディネーターの上田和幸さんは話します。

参加者の声

- 使い慣れて、他の人にも教えられようになりたい。
- 資料を作るためにパワーポイントも使えるようになった。
- 背景画面に使いたくて写真を撮りに出かけるようになった。
- 今まで知らなかったご近所さんと知り合いになった。
- 今まで関わりのなかった人ともつながれた。
- 「60代から始める!」というタイトルで安心して参加できた。
- 参加者との情報交換で区内のいろいろな情報も得られた。

たことが今後につながっていくよう『Zoomの集い』のコンテンツを充実させて、講座を受けた人以外も受けることができようになり、プロジェクトチームメンバーと相談しながら発展させていきたいです」と意欲に満ちていました。



▲区社協の上田さんと市林さん

地域福祉活動の今 5

「コロナ禍における地域福祉活動状況調査」より

市社協では、令和3年10月から、各区社協を通じてコロナ禍での地域福祉活動の推移を定期的に調査しています。

本誌ではこれまで、各活動について①通常通り活動、②一部変更して活動、③中止・休止、④終結、⑤その他の割合を掲載してきました。前月号に引き続き、今月号では、活動別の「②一部変更して活動」の具体的な内容や工夫、一方で各地域での悩みや試行錯誤の声を紹介します。

「ずっと休止中だけど何かできないかな…」「この方法なら、うちの地域でもできるかも」など、各地域での検討や話し合いのきっかけとしてご活用ください。



▲子育てサロンにて絵本の貸出を実施（城東区関目東地域）

こどもの居場所活動

- こども食堂として会場で食べるのではなく、手作りお弁当をテイクアウトで実施
- フードパントリー（食品の無料配付）という形で開催
- 全世代対象の食堂であったが、コロナ禍のため小学生のみにチケットを渡している

こんな悩み・試行錯誤も…

- これまでの会場の学校が使えなくなり中止している
- 活動を再開しているが、人数が増えて密になるのが心配
- 立上げ準備をしていたが、コロナ禍でプレオープンタイミングを検討中
- コロナ禍で自宅待機になり、買い物に困っている人への支援を開始

子育てサロン

- 予約制で人数制限（5組程度）、時間を短縮して実施
- 会館での実施と同時にLINEを通じたオンライン参加も実施
- 予約制で個別相談会を実施
- クリスマスの時期にはプレゼントの配付のみ実施

こんな悩み・試行錯誤も…

- 区内全域で今年度は中止することを決定している
- 中止しているが、子育てサロン連絡会で情報共有をしている
- 再開までは代替としてサロンにある、絵本の貸出をしている

百歳体操

- 2部制にして実施
- 人数を分けて、隔週で参加できるように開催
- 地域が広いため、会場を2カ所に分けて実施
- 試験的に屋外で開催
- かみかみ体操（お口の体操）はせずに、いきいき体操だけの実施

こんな悩み・試行錯誤も…

- 再開するにも人数調整、準備の担い手不足など、課題が多く中止となっている
- 活動者の生活の変化や体調不良で再開できずにいる
- 再開までは代替として太極拳や野外でラジオ体操を実施している



QOLを考える

大阪公立大学大学院 生活科学研究科 准教授 鶴川 重和

QOLはQuality Of Lifeの略語で、生活や人生の質を問う言葉である。QOLという概念は、第二次世界大戦後の1960年代にアメリカで注目されるようになった。その当時のアメリカは経済成長著しく、その結果として人々の経済格差が大きくなったために、財の量とともに質の検討が迫られた。ジョンソン元アメリカ合衆国大統領が、1964年の演説の中で「素晴らしい社会とは、『どれだけあるか』ではなく、『どれだけ良いか』つまり、『物の量』ではなく『生活の質』に関係する」と述べたことにより広く知られるようになった。

1970年代からQOLに関する研究が盛んに行われるようになった。初期の研究では社会的な視点から生活の満足度に焦点が当てられ、1980年代になると当時社会問題となりはじめたうつ病等の精神疾患に焦点を当てた研究へと注目が移る。1980年代後半になると、心身の機能や健康状態に焦点が当たった

医学分野での研究が発展した。日本にQOLの概念が導入されたのは1984年とされ、がん患者に対する治療の一つとして導入された。その後看護や介護、福祉分野でも注目されるようになり、現在にいたる。

QOLの定義はいまいち、かつ広範囲で定まった定義はない。医療や福祉分野でよく取り扱われるQOLの定義は、世界保健機関（WHO）による健康の定義に端を発した次のようなものである。「QOLとは、個人が生活している文化や価値観の中で、自身の目標、期待、基準、関心事に関連し、人生における自分の立場を認識することと定義される。これは、その人の身体的健康、心理的健康、自立の程度、および環境の目立った特徴との関係によって複雑に影響される広範な概念である。言い換えると、QOLを考えるということは、自分や他人の人生の意味や価値を問い、一つ一つ意味付けをするプロセスを指すのである。」



善意銀行

—皆さまの善意を大切に—

市社協では、皆さまからの善意のご寄附を、施設や団体へ払出しをおこなったり、助成金として活用させていただくことで、地域福祉の推進などに役立てています。

令和4年4月富山めぐみ製薬株式会社大阪営業所から、ジェルタイプや泡タイプの消毒液を計2万3910個いただきました。

寄附された消毒液は、大阪市障害児・者施設連絡協議会や大阪市保育連合会、大阪市児童福祉施設連盟、大阪市生活保護施設連盟を通じて市内の社会福祉施設において、有効に活用させていただいています。



▲楽しく消毒できました(豊里学園/大阪市障害児・者施設連絡協議会)

預託 団体名	預託内容	払出先(予定含む)
(株)ピエラス	アルコールハンドジェル 4,800個	21区社協、大阪市成年後見支援センター、大阪市社会福祉研修・情報センター
正道会館team蓮	100,000円	地域こども支援ネットワーク事業
介護予防ポイント事業活動者有志	5,000円	地域福祉の推進に係る事業
(株)ミタイ呉服店	30,000円	

市社協ホームページに関する アンケート調査にご協力をお願いします



- アンケートの回答は市社協ホームページから <https://www.osaka-sishakyo.jp>
- 回答期日: 令和4年7月15日(金)

QRコードからでも回答いただけます!



立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心

GK

クルマの保険 火災の保険 住宅の保険

www.ms-ins.com

情報発信を強化し、市民の皆さまに情報をより分かりやすくお伝えるために、ホームページの内容改善に向けてアンケート調査を実施します。

いただいたご意見をもとに、ホームページの内容を検討していきます。「こんな情報があったらいいな」「もっと見やすくしてほしい」など、皆さまのご意見をお待ちしています。
ご協力よろしくお願いいたします。

